

8 家庭科

宮本 真由美

1. 家庭科と自立

家庭科＝自立を援助する教科とはっきりいえるわけではないが一人の生活者として自立して生きる人間を育てることは家庭科教育の目的である。

家庭科教育は究極的に、一人一人の子どもがよりよい生活をめざす実践的な態度を育てることである。それぞれの子どもの持ち味を発揮し、進んで家庭生活の課題に関わり、課題を解決するために考えたり、工夫したり、試みたりする子どもの主体的な学習活動が効果的である。それは、ふだん何気なく過ごしている生活をしっかり見つめ、そこにあるよさや課題に気づくことから始まる。「へー知らなかった」「なぜなんだろう」「やってみたい」「どうすればいいのだろう」「誰かに聞いてみよう」「調べてみよう」「自分ならこうする」など自分との関わりで感じ、考えることで出発するのではないだろうか。

現在、社会の変化に伴い、子どもたちの姿にも変化が見られるようになったといわれる。例えば、生活が便利になり、手足を動かして働かなくても十分快適な生活を送ることができるようになったが、そのことで、子どもたちが作業を工夫したり成し遂げた後の充実感や喜びを味わったりする経験が少ない。また、兄弟姉妹や家族数も減り、家事の機械化などで、人と関わりながら生活することも少なくなっている。そのため、基本的な生活技能や勤労観の体得、人との協調性などについて習得することが難しく、自立が遅くなっているともいわれている。

これらの問題のすべてを解決していくことが家庭科の目的ではないが、家庭科が自立に向かう子どもたちの援助となるのなら、その方法を探っていくことは大変意義深いと考える。

2. 自立を育む家庭科の授業

子どもたち一人一人が、より主体的に活動し、自らの力で課題を解決していくためには、めいめいの考えを生かした学習活動の場を保障していかなくてはならない。主体的な学習活動を展開するには、家庭生活への「関心・意欲・態度」はもちろんであるが子ども自身が、それまでの生活経験や学習経験で身につけた知識、技能、その他自分で考えたり試行錯誤したり判断したできるように、すべての活動において「自分がなら」という意識を持つことができる活動を設定することが重要である。また、こどもが自分の思いや願いを具体的にあらわし実践しようとするには、技能や表現力が必要であり、それらを支える知識や理解も必要になる。したがって、子どもが受け身的に反復練習によって身につけていく技能ではなく、意欲的に課題に取り組む過程で必要感から考えたり工夫したりすることにより自然に身につけていくことが子どもたちの自立を育む第一歩と考えるのである。

3. 家庭科でめざす子ども像

上記のようなことをふまえて、めざす子ども像を次のように設定した。

(1) 日常生活を課題をもって見つめ、気づきを持つことができる子ども。

(観察の視点を持っている。)

(2) 友だちや家族などの関わりを大切にしながら、自分らしい生活をめざして考え、実践する子ども。

- (人との関わりの中で自分のよさを発揮できる。)
- (3) 課題解決の方法を自分の思いの実現のために自分で選んだり考えたり決めたりする子ども。
(自己決定することができる。)
- (4) めあてを持ち、計画的に実践する子ども。
(見通しを持つことができる。)
- (5) ふり返りをし、これからの生活へ生かしていく子ども。
(ふり返り、次へつなげていくことができる。)

4. 自分で決めることを大切にした学習とするために

「自分で決める」からこそ、決めたことに対して本気で集中し、没頭できるものである。また、「自分で決める」からこそ、責任を負うものである。様々な選択肢のうち、自分で一つ「決める」までの過程には、その子なりの考えが一番強く反映するものである。何を基準に選んだのかということがその子らしさになっている。毎日の生活の中でもあらゆる場面で自己決定は行われている。成長するに従い、その頻度はますます高くなる。何を選択し、どう生きていくのか。「生きる力」を育てていく上でも重要である。

できるだけ「自己決定」できる機会を作り、子どもに任せる場面を作りたい。ただし、その決定の動機が内発的で、切実感のあるものでなければ、その決定やそれに続く活動は、「自立」を育むものにはなり得ない。ただ作るものや課題を「決める」のではなくて、「自分の思いの実現のために、自分で決める」という決定が求められると考える。

5. 自立に向かう子どもたちを育む家庭科の授業の具現化に向けて

(1) 学習の見通しをもてるようにする

製作、調理実習を実施するにあたっては、目的意識を十分に持たせながら子どもたちの願いを大事にした活動計画を立てるようにする。

(2) 体験的学習を取り入れる

少なくなっている子どもたちの生活経験を補っていけるよう一人一人が実際に自分の手を動かし、体を使って体験できる場の設定が大切である。これは技術面だけではなく、思考面でも同じことがいえる。つまり体の様々な感覚を通して、学習の中で試行錯誤を繰り返しながら学習を深めていくことができるといえる。

(3) 自分の生活に生かす

まずは、自分の生活を見つめる機会をできるだけ多く設け、その中から課題を見つけることができるようにする。そこから自分のめあてを持ち、学習を深め、最終的には、学習したことをまた自分の生活に返して生かしていくことができるようにする。そのためには、子どもたちが実践してみよう、したいと必要感や期待感を持つような題材を選ぶことも大切である。

(4) 個の確立と友だちとの関わり

友だちのよさに気づくためには、まず自分をよく知り、自分の考えを持つことが必要である。また、一人一人のよさは、他と関わることによってはじめてよさとなる。子どもたちが自分のよさに気づき、認め、更に友だちのよさに気づき認め合うことができれば、よりよい生活を創造することができるようになると思われる。

引用・参考文献

- 1) 家庭科教育実践講座刊行会、『第1巻21世紀を生きる子どもを育てる新しい時代の家庭科教育』、ニチブン、1998、p. 42-48